
よしなしごと

くるすなたか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よしなじ」と

【著者名】

ZZマーク

ZZ6650

【作者名】

くるすなたか

【あらすじ】

つれづれなるままで、日暮し、硯に向かひて、心にうつづくよしなし事をそこはかとなく書き綴つた吉田兼好。

僕も、とある出来事がきっかけで、心にうつづくよしなし事をそこはかとなく書き綴り始めた。

十一月 1 (前書き)

この小説は、事実に虚偽を織り交ぜた半フィクションストーリーである。

吉田兼好は心にうつべりゆくよしなし事を書き綴つた。
僕もそつしたいと思つ。

ある日、僕、来須菜高は大阪府大東市の野崎といつところにある中学校でいじめられていた。

前からいじめられていたが、最近は相手も陰湿で、こちらも鬱憤がたまっていた。そんな時、国語の時間。分割授業とかで気の弱い若手先生の方に回されていたのが運のツキだったのかもしれない。黒板に書かれたことをノートにうつす、うつさない以前にノートを取られてしまった。

最初は松口、という奴だつた。

野球部ではレギュラーを張つていたが、悪ふざけが過ぎた。ノートが彼の手に渡り、それを取りかえそうとしているうちにまた久木という奴にシャーペンをとられてしまつた。結果的に神奈川や福村もかかわつていた。

なんとか取り返し、その日の授業は終わつた。

だが、最後に久木に取られたまま、久木は教室に帰つた。

チャイムは鳴つていたので、挨拶を待たずして久木を追つた。な

くされでは元も子もないからだ。

向こうでは久木は平然と座つていた。久木にノートの在り処を強い口調で聞いてみた。

「藤に渡した」軽々とした口調で答えた。

藤を睨むと、挑発するような動作をしながら「さあどこやろおか？」など言いながら、こちらを睨み返してきた。

腹を立てた。

気付くと、つかみあいの喧嘩になり、まわりに人だかりができるていたし、机の中の荷物は散乱していた。

力は五分五分だったからか、誰も止めようとなかつたが、喧嘩は中途半端に終わることになった。

喧嘩を終えて、ちらかった自分の机の荷物を直している時だったろうか。

須磨、という奴がいた。シニアリーグだかボーイズだかという本格的な野球チームに入つていて、力も抜群に強かつた。途中で学校を堂々と抜けられる不良だつたが、友達当たりはよかつたようだ。

僕は元々あまり好きではなかつたが。

そいつが「こちちやし！」とか叫びながら、イスの下からノートを取り出した。

ちなみに彼が座つていたイス、すなわちノートを取り出したイスは藤のイスだつた。

面倒くさいことはごめんだ、と思つてゐるばずの割には怒りのあまり、僕は須磨に向かつていた。

ノートを取り返すことが目的だつたが、彼はノートをどこかへ放り投げた。

個人的には「ふざけんな」と押したつもりだが、後から聞いた所ではつつかかってきた、と先生からの供述に答えてゐるらしいので、怒りのあまりそうなつたのかもしれない。

彼は中学に入つてから特に喧嘩早かつた。

抜群な力で半開きのドアを蹴飛ばし、廊下にひきずりだされた。そこからはよく覚えていないが、彼も鬱憤がたまつていたのだろうか。後から聞いた話によると、思いつきりの膝蹴りを五、六発受け、とどめの足蹴りで鼻血が噴出したそうだ。

唯一覚えているのは蹴られた時、脳内イメージは、まさに星が飛んだような画だつた。

鼻血を床に、服につけながら、別府という保健委員に保健室に連れて行かれた。

途中に通るクラスの窓から、女子男子友達非友達問わず自分の顔を眺めていた。

「かわいそうに」の田だつたのか、ただの物珍しさだったのか

なんとなく、それだけがかなり気になつた。

保健の先生にビニール袋に入つた氷水を渡され、十数分冷やしていると、チャイムが鳴つたが、精神的にも戻りたくは無かつた。

先生は「病院に行かなしやあないな」と諭すように喋つたあと、職員室の電話から誰かへ電話をかけている。

先生に連れられるまま歩くと、地元のタクシーが「送迎」という名前で正面玄関へ来ていた。

電話は、タクシー会社へかけたのだろう、と脳内で解釈した。タクシーに乗ると、先生は中学校から歩いていけないこともないくらいの距離にある大東でたぶん一番大きい病院の名前を告げ、運転手は「はい」と頷き、メーターを作動させた。

タクシーは国道を山と沿つて走つていくとぶつかる高架を左にそれると、大学の前の交差点で右折する。やがて、四年ほど前に盲腸で入院したことがある大きい病院が見えている。

盲腸で入院した時ははじめての「一人」であることあり、寂しくてヒマすぎて、なんといってもお腹がすいた。あまり、いい思い出があるとはいえない。

先生が受付を済まし、お年寄りしか座つていない内科の待合室の前に座つて、呼ばれるのを待つた。

「来須さん」

意外と早く呼ばれた。「内科 特別室」というところだった。CTスキャンもしていなければ話もしていないが、あまりいい結果ではない気がした。

十一月 2 (前書き)

この小説は、事実に虚偽を織り交ぜた半フィクションストーリーである。

「内科特別室」では、30代くらいの男の看護士と、40代後半くらいの医師が待ち構えていた。

「柔らかな医者っぽい口調で僕に聞いた。

少し考えたが、僕は絶対に正直言わないといけないと思った。これでただの喧嘩やプロレスじつこで済まさると、絶対にいいことは起きない、直感でそう感じていた。

それは直感ではなく、自分の正義感と、彼に対する嫌悪だったのかもしねりない。

「…………けられました。膝で。」

「え？ けられたの？」

その医者は、驚くともなし、同情するでもなし、こちらから見えて何を考えているかわからない表情をしながら受け答えをしていた。どういう状況で蹴られたか、鼻血の量、その怪我について本当のことと、正直に、全て話した。

「じゃあ、とりあえずCTスキャンで検査をしておきましょ。うか。

何故かその医師が同行して案内されたのは、「CTスキャン」と書かれた部屋の前だった。

保健の先生が持っている薄い黄色のクリアファイルをナースステーションのような所の看護婦に渡していた。

「10分くらい待ち時間いただきますけど」と看護婦は先生と自分に話しかけた。文章に書き表してみると、話が続くようなセリフだが、看護婦も、保健の先生も、自分も話を続けなかつた。

「CTスキャン1」の前にあつたのは、「喫茶 ほすぴたる」と窓にシールが貼っている喫茶店だった。

「あつたかい餡餅・蕎麦はじめました」だとか「タマゴサンデー 3

50円」だとか書かれた紙がペタペタと窓中に貼つてあり、喫茶店の中の様子は殆ど見られなかつたが、手前のおばさんがトーストに砂糖をふりかけていることだけは分かつた。

盲腸で入院していた時、何も食えない状態でタマゴサンドのチラシを見つけていたら、発狂したかもしれない。

そんなどうでもいいことを考えれば、10分くらいの暇はつぶせるのではないか、と思つたが退屈な上、腹を立て、さらに不安な上での10分は30分にも、40分にも感じられた。

周りの話に聞き耳を立てたり、周りのものをやたら観察したりしてひまをつぶした。

「オペ明日やる?」遠くから若い男の声が聞こえてきた。

「名古屋までやつたら何?近鉄?新幹線?タクシー?」今度はそれに相応する年の女の声だつた。

二人は誰も寝ていない移動式ベッドにもたれながら話していくが、三人目が奥からやつてきた。 同年代の男のようだ。

「新幹線が一番早いけど、金かかんで」

「経費で落ちるから新幹線でえつか。」女はなぜか落胆したような声で答えた。

何の話か気になつたが、看護婦の若い声で名前を呼ばれたため、席を立つて「CTスキャン」に一人で入つた。

待つっていたのは片言のメガネをかけた医者だつた。「李」という名字がちらりと名札から覗いた。

「ドコデケラレタンデスカ?」CTスキャンの台に寝かされながら聞かれたので起き上がるつとしたが、口だけでいい、といふジェスチャーをされたので寝ることにした。

枕らしき下に背骨置きらしき部分があつたが、そのせいでやけに窮屈だつた。

「膝です」

「ヒザ?」ある程度の日本語は喋れるようだつたから、膝がわから

ないことはないだろうとは思つたが、指の自分の膝の位置を差した。「アア、膝デスネ」今から思えば場所を聞いていたのかもしない。

スキヤンがはじまつた。「樂にしてください」「動かないでください」という女性の機械音が機械が発せられた。例の背骨置きで背骨が痛く、はじめてのCTスキヤンだ。緊張するな、樂になれ、という方が不自然なかもしぬなかつた。

しばらくすると、台は移動し、元の位置に戻された。

起き上がるうとしたが、奥で操作していた例の李さんが「オキアガラナイディイヨ」と強めの口調で言つた。

李さんは奥にいたと思われる医者を呼び、話をすると、一人は少しあわて始めたように見えた。

様子がおかしいな、と思い始めたころには、さつき名古屋に行く話をしていた男女がもたれていたようベッドに六人がかりで寝かされていた。李さんが「首ヲ特ニ氣ヲ付ケテ」「ストレッチャー呼ンデ来テ」と他の五人に諭していた。

李さんが幾度も「半年カ一年クライ前に首ケガシマセンデシタカ？」と聞いていたのがひつかかつた。

ベッドのまま運ばれた。医者の独り言によると病室が空いていいのでとりあえず「点滴室」においておくそうだ。

点滴室では、李さんをはじめとする五人に首にコルセットのようなものを巻かれていた。真上しか見られず、窮屈にも程があつた。これから暇な時間がありうるので一眠りすることにした。

起こされたのは、母が諸福でしているパートからかけつけてきた時だつた。諸福からタクシーで駆けつけてきたと思ったが、バスで家まで戻り、マイカーで來たようだつた。

母はコルセットを見て驚いていた。先生から蹴られた時の状況の話を聞いた後、李さんから怪我の話を聞いた。

母から伝え聞いた話だが、一年ほど前から骨折していく、自分は
気付かずに生活していたらしい。

なんてこつた。

だが、今回のでそれが悪化したらしい。
なんてこつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7665o/>

よしなしごと

2010年11月8日19時10分発行